

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 60 号

(2021 年 12 月 8 日)

発行所：東洋大学 北村英哉研究室

日本グループ・ダイナミックス学会

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人：北村英哉

編集担当：藤村まこと

目次

第 67 回大会後記	2
最初で最後のオンライン大会を振り返って	2
第 67 回大会参加記	6
コラボ・リクエスト企画	8
優秀論文賞	10
優秀学会発表賞	12
国際化支援	18
機関誌『実験社会心理学研究』について	21
会費改定についてのお知らせ	22
事務局からのお知らせ	23
2022 年度以降の年会費等および機関誌送付について	23
グルダイ学会関係連絡先	25

第 67 回大会後記

最初で最後のオンライン大会を振り返って

大会準備委員会 事務局長

谷口 淳一(帝塚山大学)

日本グループ・ダイナミックス学会第 67 回大会を、9 月 11 日、12 日の 2 日間にわたり、帝塚山大学を主催校としてオンラインにて開催いたしました。学会設立後初のオンライン開催となり、会員の皆様にさまざまなご不安とご迷惑をおかけしましたが、なんとか無事に開催することができました。

オンライン開催ということで参加数および発表数の減少が懸念されましたが、144 名の方に参加して頂き、特別講演 1 件、シンポジウム 2 件、ワークショップ 2 件に加え、個人発表も 68 件（ロングスピーチ 8 件、ショートスピーチ 14 件、English Session 4 件、ポスター発表 35 件（そのうちインタラクティブあり 16 件）、コラボ・リクエスト企画 7 件）と例年の対面開催の大会と遜色ない数となりました。改めまして、大会に参加して下さった会員の皆様、貴重なデータを本大会で発表して下さった皆様に感謝申し上げます。

皆様ご存知の通り、本大会は当初、2020 年 9 月に帝塚山大学学園前キャンパスを会場として開催予定でした。大会開催については 2019 年の夏頃に当時、大会担当常任理事だった相馬敏彦先生から打診がありました。そこで、本学の水野邦夫先生と学長の蓮花一己先生に相談して、お引き受けすることとして、水野先生に無理を言って大会委員長を引き受けて頂き、私は事務局長として大会運営に携わることとなりました。本学で大会を開催することで、本学大学院生や学部生の良い刺激となることも引き受けた決め手となりました。ところが、2020 年となり、徐々に covid-19 の感染が拡大し緊急事態宣言が発令され、本学でも新年度の授業は一時、全面休講となりました。ただ、学会を開催する秋には恐らく収まっているだろうとの予測のもと、準備を進めていました。3 月末に大会 HP を稼働、さらに 1 号通信を郵送し、大会ウェブサイトを開示して、参加・発表受付をスタートしました。ただ、徐々に感染拡大が進み、収束の見通しも立たなくなりました。準備委員会でオンライン開催の可能性も含めて何度も検討を重ねましたが、あくまで対面での開催に拘り、1 年延期しての開催とすることを決定しました。既に数名の方が参加・発表登録を済まされており、お詫びのご連絡をしました。

そして 2021 年となり対面での開催を想定した準備を進めていましたが、2 月末にオンラインでの開催を決定しました。秋には感染が収束している可能性も考えられたものの、対面とオンラインの両方を想定して準備を進めるよりも、どちらかに絞った方がより十分な準備が行えると判断したためです。このような経緯でグルダイ始まって以来初のオンライン大会の開催となりました。ただ、オンラインといっても、そもそもどのように準備していいのか、オンライン大会がどのようなものなのかも分かりません。また、そもそも予算的に実施が可能なのかという不安もありました。そこでまずは準備委員会スタッフを再構成することから始めました。当初は帝塚山大学で開催とい

うことでグルダイ会員ではない本学の教員にスタッフをお願いしていましたが、オンラインになったことで他大学の先生方にスタッフに入ってもらえることにしました。また上記のように様々な不安があったことから、気心が知れた古くからの仲間である村上史朗先生、西村太志先生、相馬敏彦先生をコアメンバーとする、いわゆる“お友達内閣”を結成し、それからの半年間、毎日のように zoom や slack、時には対面で議論を重ねました。

本大会では、オンラインではあるものの、リアルタイムでインタラクティブな大会になることを目指し、準備を進めました。口頭発表やワークショップを、zoom を用いてリアルタイムに実施することに加え、ポスター発表の一部とコラボ・リクエスト企画をオンラインイベントスペース oVice を用いて実施しました。oVice については常任理事（学会事務局長）の尾崎先生よりご紹介と体験する機会を提供して頂き、その後、西村先生が中心となって oVice 社と交渉、またマニュアル作成やイベントスペースのデザインなどを一手に引き受けてくださり、使用に漕ぎつけました。会員の皆様が慣れていない発表ツールを導入することでの混乱も危惧されましたが、2 度の練習会を実施したことなどもプラスに働き、当日は大きな問題が起こることなく、参加者の皆様のアンケートでも満足頂ける機会になったことが窺えました。

常任理事会企画の特別講演、および大会準備委員会企画の 2 つのシンポジウムはいずれも covid-19 に関する時勢を捉えたもので、多数の方に参加・聴講して頂きました。AASP 会長の Hoon-Seok Choi 先生による特別講演「Dealing with Covid19: The Role of Individualism-Collectivism in People's Responses to Covid19 Pandemic」は、最新の研究データに基づくメッセージ性と示唆に富んだ興味深い内容でした。司会の尾崎先生による詳細な通訳によって、研究内容により集中することができました。シンポジウム「新型コロナウイルス禍のグループ・ダイナミックス研究」は、昨年度に募集された新型コロナに関連した研究に対する助成事業に採択された 4 名の先生方に発表して頂きました。現会長の北村英哉先生に司会を、前会長の西田公昭先生に指定討論をお願いし、それに加えて中谷内一也先生にも指定討論をご担当頂きました。実は中谷内先生には幻となった 2020 年大会のシンポジウムへの登壇をお願いしており、2021 年になり改めて指定討論でのご登壇をお願いしたところ、帝塚山大学にいらっしゃったよしみ（筆者の前任で、筆者は現在、中谷内先生の元研究室で先生が残された椅子や机を使用させて頂いております）でご快諾頂きました。もう 1 つのシンポジウム「covid-19 は親密な関係をどう変えたか？ーパンデミック前後での複数のパネルデータから見えてくるものー」は準備委員の相馬先生を中心として企画してもらいました。聞くところによると、本企画は他学会での披露も選択肢にあったようですが、本大会を選んでくれました。特別講演、いずれのシンポジウムもフロアーから多くの質問があり、充実した議論が展開されていました。

本大会の最大の目玉はなんといっても oVice を用いて実施したオンライン懇親会でした。グルダイ flash にて流させて頂いた懇親会の誘いの文面については関係各方面からお褒めのお言葉を頂き、実際にそれを読んで大会参加を決めたという方もいらっしゃいました。あの文面は相馬先生の力作で、その文才に友人ながら感嘆しました。当初予定の対面大会ではぜひ参加者の皆様に奈良のお酒を堪能して頂こうと思っていました。それが叶わなかったため、せめて奈良の地酒を参加者の皆様にオンラインで購入して頂き、大会オリジナルのお猪口で乾杯して頂くという企画を進めることになりました。登酒造（奈良県天理市）様には色々と無理を聞いて頂いたのですが、参加者の皆様が奈良の地酒を絶賛されていたことをお伝えすると大変喜ばれておりました。奈良にお越しの際にはぜひお店の方にも足を運んで頂けると幸いです。ちなみにお猪口のデザインは準備委員のご家



族にお願いしたのですが、こちらもご好評を頂き、ありがたかったです。

以上のように本大会ではさまざまなことにチャレンジしましたが、これらのほぼすべてが準備委員に加わってくださった3名の先生方のアイデアです。私自身は保守的で「できるだけ無難に楽な方法でやろうよ」という姿勢だったので、本当に3名の先生方のお力がなければ、“しょうもない”大会になっていたでしょうし、そもそも開催できなかったかもしれません。普段は“お友達”なのでお礼を言う機会もないですので、この場を借りて感謝の意を伝えさせてください。また、宮島健先生、森下雄輔先生、宮川裕基先生には無理やりスタッフに入って頂きましたが、準備開始当初から学会当日に至るまで献身的にサポートして頂き、本当にありがとうございました。広報担当常任理事の藤村まこと先生には2020年の大会に向けた段階から色々と相談にのって頂いており、2021年になって常任理事になられたことで準備委員からは外れられましたが、グルダイ flash の配信や、SNSでの大会参加の誘いなど、色々とお世話になりました。また、大会当日は準備委員が帝塚山大学に集合して、タイムキーパーなどの運営を行っていましたが、金政祐司先生が心配して駆けつけてくれ、オンライン懇親会を盛り上げてくれたり、スタッフの食事を買い出しに行ってくれたりで大活躍で、その友情に涙しました。ちなみに学会大会はある意味、お祭りのような要素があるものの、どうしてもオンライン大会ではその雰囲気が失われてしまいます。ただ、会場に集合していた準備委員は2日間お祭り気分を味わえ、個人的にはその2日間はとても楽しかったです。

オンライン開催にあたっては、会長の北村英哉先生、前会長の西田公昭先生、大会担当常任理事の橋本剛先生、事務局長の尾崎先生はじめ常任理事の先生方からも早々に御快諾を頂いた上で、絶え間ない全面的サポートを頂きました。私の怠惰で学会準備が進まず、ご心配とご迷惑をおかけしたことを改めてお詫びしますとともに、会長が率先して SNS を通じた大会広報をしてくださるなど、大会開催に関わる大きな事から細やかな事まで手厚くサポートして頂いたことに感謝申し上げます。澤田様、小畑様はじめ中西印刷の皆様には、オンライン開催にあたって他学会の事例など様々なアイデアを提供して頂き、大会の成功に向けて常に寄り添って頂きました。そのほか大会に関わってくださったすべての皆様に深く感謝申し上げます。

本大会ではさまざまな取り組みを行ったものの、失敗も多かったです。最も大きな反省点としては参加者の皆様への情報提供が五月雨式になってしまい、またメールや大会 HP、グルダイ flash での配信など、さまざまな媒体から行ったために、参加者の皆様が必要な情報を見つけられないということが多発しました。たとえば、大会当日に ORSAM PORTAL に入るための情報がなかなか

見つからないというのがその1例でした。また、ポスター発表のうち、インタラクティブなしの形式のものについては ORSAM PORTAL 上のコメント機能を用いて議論することになっていましたが、全体的にコメント数はかなり少なくなっていました。これも情報発信の不備が大きな原因かと思われます。その他にもわれわれが気づいてないことも含めて多くの失敗、反省点があり、参加者および会員の皆様には多くのご迷惑をおかけしたかと思えます。改めてお詫び申し上げます。

このように多くの反省はあるものの、オンライン大会の1つのあり方、可能性は示せたのではないかと自負しています。とはいうもののやはり対面大会には敵わないというのが正直な感想です。本大会がグルダイ最初で最後の伝説のオンライン大会となることを願っており、本大会の経験は今後の“もしも”に備えた保険として担保されればと思います。来年の立命館大学での大会は対面で盛大に開催されることを、心より祈念しております。



大会当日に oVice のサポートをしている谷口先生

グループ・ダイナミクス学会第 67 回大会における 3 つのキーワードと大同

沓澤 岳（国立研究開発法人 産業技術総合研究所 人間拡張研究センター）

日本グループ・ダイナミクス学会第 67 回大会は、担当校である帝塚山大学の主導のもと、まだ夏の暑さが残る 9 月 11 日、12 日にオンラインで開催された。昨年からは、オンラインでの学会開催が国内外で主要となった今日において、私自身初めてオンライン開催に参加したが、ライブストーリー形式での開催により、対面さながらの臨場感と空気で学会に参加することができた。本大会も例年通り、様々なグループ・ダイナミクスに関する研究が発表されていたが、それらの多くは共通する点もあり、大きく分けて 3 つのキーワードで表現できる。それは、「災害復興支援」、「多様性」、そして「新型コロナウイルス」である。これらは、



この約 10 年間で人や集団との関わり方に大きな影響を与えたものであり、今後どう対応していく必要があるのか研究知見の蓄積が求められている。本大会では、3 つのキーワードなどに対し、それぞれの研究者の視点から実施した先進的な研究が集まっていた。これらの発表を聴講し、今後グループ・ダイナミクス研究が目指すべき方向性を総括する言葉を自分なりに模索していたところ、一人の研究者の言葉がこの疑問を解決してくれた。その研究者は、2 日目の常任理事会企画特別講演として「Covid19 に対処する：パンデミックに対する人々の反応における個人主義-集団主義の役割」という演題で登壇された、アジア社会心理学会(AASP)の会長であり、韓国の成均館大学の Hoon-Seok Choi 先生である。彼は、発表の中で自身が取り組んだ実証研究の結果などをもとに、集団主義と個人主義のふたつの文化的価値観が新型コロナウイルスのパンデミック下で、どのように作用していたのかを明らかにし、今後のグループ・ダイナミクス研究で求められていることを示してくれた。その時に用いられた「大同(Great harmony)」という言葉が、本大会の研究知見を基に今後目指すべき方向性を総括した一言だろう。先に挙げた 3 つのキーワードは、どれも被災者やマイノリティ、異なる文化的価値観を持つ集団などと共存することが求められている。そのため、グループ・ダイナミクスの観点から、どのように「大同」していくのかを明らかにすることは、国内だけではなく世界中に大きな恩恵をもたらすことができる。本大会を通し、改めてグループ・ダイナミクス研究の重要性を認識する共に、我々研究者に与えられた責務の大きさを実感することができた。対面での実験実施が難しく、様々な制約が残る中で研究を継続していくことは決して容易なことではないが、我々研究者同士も互いに助け合い「大同」していくことで、更なる研究発展をもたらすことができるだろう。これからもグループ・ダイナミクスの研究を通し、一人でも多くの人が過ごしやすい社会を実現できるようになることを切に願っている。

第 67 回大会参加記

シンポジウム参加報告

西浦真喜子(北陸大学)

日本グループ・ダイナミクス学会第 67 回大会では、大会準備委員会の先生方が企画された 2 つのシンポジウムが開催されました。いずれも、新型コロナウイルスに関するものであり、心理学が取り組んでいる課題について議論されました。

大会 1 日目のシンポジウムは、「新型コロナウイルス禍のグループ・ダイナミクス研究」と題され、zoom によるリアルタイム配信にて行われました。日本グループ・ダイナミクス学会では、2020 年の 5、6 月にコロナウイルスに関連した研究の助成が行われていました。そちらに採択された 4 件のご研究について成果が発表されました。それぞれのご研究では、自粛生活や在宅勤務によるストレス、テレワークを背景とした仕事と家庭のバランス、あるいは、コロナウイルスに関する知識と感染予防行動の関連、感染予防行動促進のためのモラル化に焦点が当てられていました。



大会 2 日目のシンポジウムは、「covid-19 は親密な関係をどう変えたか？ -パンデミック前後での複数のパネルデータから見えてくるもの-」と題され、同じく zoom によるリアルタイム配信にて行われました。こちらは、親密な対人関係におけるパートナーからの暴力に焦点が当てられ、公的統計や縦断調査データに基づいた分析結果が報告されました。

話題提供後の指定討論では、複数の研究結果からの解釈や、研究結果からどのような対象に何を伝えたいのか、といったことが議論されました。新型コロナウイルスをめぐる状況は変化が速く、次々と新たなことが判明します。それに伴い、人々の意識や行動も影響を受け、さらにそれが多様であり、現時点でひとつの、あるいは確固たる答えを出すのは難しい、ということを感じさせられました。しかし、難しいからといってやらないのではなく、研究や議論を重ね、取り組み続けようとする先生方の姿勢を拝見し、尊敬の念を覚えるばかりでした。

2 日目のシンポジウムにて企画、司会、話題提供をされた相馬敏彦先生は、シンポジウムを「モチベーションを提供する場」というようなこともおっしゃっていました。シンポジウムに参加したことで、自分が置かれた状況で、自分ができることややるべきことをあらためて考える契機ともなりました。

最後に、本大会およびシンポジウムを企画・運営いただいた先生方と、本参加記を執筆する機会をいただきましたことに、深く感謝申し上げます。

参加者の声

榊 敏朗（SAT 研究所長） toshiro.sakaki@satlab.page

人生 100 年時代の幸せな生活をめざして

人々が幸せに充実した暮らしを送るためには、健康や医療ひとつとってもすべてがサイエンスだけで片付けられる単純なものではありません。日頃サイエンスやテクノロジーをベースにした活動が中心の研究者にはない、心理学的な視点での捉え方、切り込み方を模索していました。そんな問題意識の中でコラボ・リクエスト企画は、普段なかなかめぐり合う機会のない社会心理学の研究者の皆さまと意見交換ができる非常に貴重な場となりました。

当日は、シニアの生活や生き方に興味を持つ研究者の方々、そして調査のプロフェッショナルなど多岐にわたる方々にご参加いただき、とても有意義なものになりました。ここで知り合った方々とはリアルでの意見交換も行い、人生 100 年時代の幸せな生活を送るための行動変容をいかにおこすかという多面的な研究・解析を行い、社会実装を経て、ぜひビジネスにまで昇華させたいと考えています。

コロナ禍での学会開催であり、バーチャル会場を使った本企画もリアルでの意見交換と全く遜色ない交流ができたことにも、とても満足感がありました。ご準備、ご尽力頂いた大会関係者の方々に、この場をお借りし御礼申し上げます。



人生100年時代の 幸せな生活と行動変容のための 社会心理学的アプローチ

September 11, 2021

合同会社SAT研究所
榊 敏朗、鈴木 雅、木野ゆりか

連絡先: toshiro.sakaki@satlab.page

Homepage:



コラボ・リクエスト企画を振り返って

常任理事（渉外担当）

五十嵐 祐(名古屋大学)

第 67 回大会のコラボ・リクエスト企画では、過去最多の 7 件の発表がありました。発表テーマも、幸福感、組織論、自治体の DX、ヘルスマーケティング、シニアの活動、PTA 活動など、多岐にわたりました。2 年ぶりの企画ということに加え、オンラインでの発表のため学会会場に出向く必要がなく、参加のためのハードルが下がったことも、参加された企業の皆様にはプラスに作用したかもしれません。また、発表ツールとして用いた oVice では、会場全体が見渡せ、移動の時間的ロスもないため、ポスター発表とコラボ・リクエスト企画、その後の懇親会まで、異なるセッションをまたいだ交流が理想的な形で促進されていたと思います。参加された企業の皆様からは、研究者や他の参加企業の方々との議論を通じて、問題への理解がより深まったというポジティブなコメントを頂きました。その一方で、具体的な共同研究のマッチングに結びつけるための企画上の工夫については、まだまだこれからというのが現状でもあります。アカデミアの世界に閉じた学会ではなく、社会に開かれた学会としてのあり方を考える上で、ニーズとシーズを創造的に結びつける産学連携や異業種間交流は有望なアプローチです。ぜひ今後も、会員の皆様による本企画での積極的なコミュニケーションを期待するとともに、学会としてもより効果的なアピールの方法を考えていきたいと思っています。

今年度のコラボ・リクエストのテーマ

- 人生 100 年時代の幸せな生活と行動変容のための社会心理学的アプローチ
- 地域でのステークホルダーを巻き込んだ行動変容
 - ー自治体 DX における職員や市民の意識改革への取り組みー
- シニア女性の活動の場についてー仲間との心地よい場を創るには？ー
- 健康の多様性に応えるための健康行動メカニズムの理解
 - ーWell-being を提供するマーケティングー
- リモートワークで会議が増える、会議が長くなる
 - ーマネージャーのバーンアウト・プロジェクトのデスマーチを防ぐための、理論と実証、両輪でのアプローチ検討ー
- PTA というコミュニティの活性化要因について
 - ー保護者が参加して楽しい満足度の高い PTA へー
- サイロ型組織のコミュニケーション課題
 - ークリエイティブでスピード感があり、ストレスが少ない組織を創るには？ー

優秀論文賞

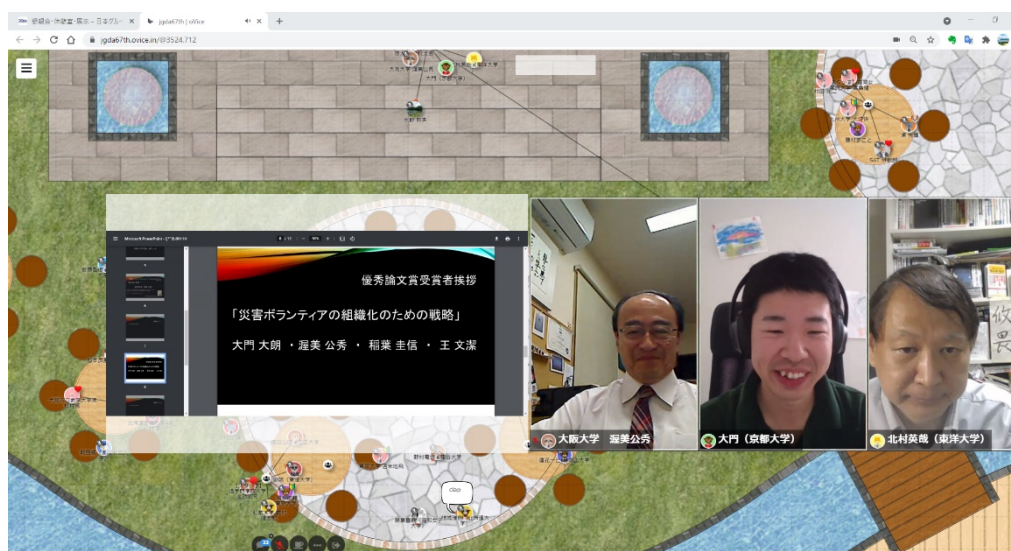
選考結果の報告

機関誌編集委員長 常任理事
坂田桐子（広島大学）

今年の優秀論文賞の選考対象論文は、実験社会心理学研究第 60 巻 1 号及び 2 号に掲載された原著論文 4 編、資料論文 1 編、Short Note 2 編の計 7 編でした。この中から優秀と考えられる論文 3 編を選び、1 位から 3 位まで順位をつけて、8 月 30 日を締め切りとして編集委員に投票をお願いしました。論文の著者となっている編集委員を除き、19 名の編集委員から投票が届きました。規程に従って、1 位票に 3 点、2 位票に 2 点、3 位票に 1 点を与えて集計しました。その結果を参考資料として、9 月 10 日に優秀論文賞選考委員会を開催して協議した結果、下記の論文に優秀論文賞を授与することに決定いたしました。

大門大朗先生・渥美公秀先生・稲場圭信先生・王文潔先生
災害ボランティアの組織化のための戦略
(第 60 巻第 1 号, pp.18-36)

受賞された先生方、おめでとうございます。今後のご研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。



(懇親会@oVice での受賞者挨拶の様子)

受賞者の声

優秀論文賞

大門大朗・渥美公秀・稲場圭信・王文潔 (2020)

災害ボランティアの組織化のための戦略
実験社会心理学研究 第60巻第1号, 18-36.

大門大朗 (京都大学)

この度は、歴史ある、そして名誉ある賞に選出していただきまして、優秀論文選考委員の先生方に心より感謝申し上げます。また、益城町社会福祉協議会の皆様を始め、お仕事の合間を縫って研究にご協力いただいた皆様あつての受賞と考えております。重ねて御礼申し上げます。

本論文は、2016年4月に発生した熊本地震後の益城町での災害ボランティアセンターでの経験をもとに執筆した論文でした。当時、多くのボランティアが現地に駆けつけていましたが、少なくない方が、活動することなく、被災地を後にされていました。駐車場に入りきれない、ニーズがない、電話が繋がらない……これだけ住民が困っているのに、災害ボランティアセンターは、ボランティアの受け入れを断っていたのです。そして、そこにいた誰しもがそのことに憤りを覚えていたと思います。事実、センターの職員も、様々な形で批判を受けていました。現地で活動する団体の（その界限では名の知れた）方に、10分近く罵倒に近い言葉を浴びせられた男性職員の方。駐車場がいっぱいだからとボランティアを断った際に、詰め寄られて「何も変わっていないのに前らここでボランティアをやめさせるのか」と言われた女性職員の方。受付開始の2時間前から並んだボランティアの怒りをおさめるために土下座をした女性職員の方。こうした話には枚挙に暇がありません。ただ、今挙げた3人の職員も被災された方だったのです。自分だって親戚の方を亡くしたのにどうしてよそ者から罵倒されないといけないのか。両親の介護をしながら、ビニールハウスで寝泊まりしているのに、さも益城町のことを知らないかのように詰め寄ってくる人になぜ頭を下げなければならないのか。自宅が全壊し、車中泊をしながら休みなく通勤している中で、センターの状況を理解してくれるボランティアはいないのか。

私が被災地で見た光景は、こうしたねじれた現状でした。様々な団体が集まるネットワーク団体の皆さんは重要なことを議論されていたのだと思いますし、大切なことです。支援の手が届いていないところへ向かった皆さんも、支援の目からこぼれ落ちる方に寄り添う大事な活動をされていたと思います。「被災地の受け入れが整っていないから」と想像の及ぶ方ほど、物分りよく被災地から去っていかれました。ですが、結果そこに残ったのは——最も被害が大きく支援が必要なはずの街であるはずなのに——いろいろな意味で置き去りにされた災害ボランティアセンターでした。そして、本論文は、こうした状況を整理し、少しでも解決の緒を提示するものを目指して執筆されたものになります。もちろん、すぐに現場で有効な処方箋はないと思います。しかし、こうした状況を生まないために、議論を喚起する論文となることを祈っています。



優秀学会発表賞

2021 年度優秀学会発表賞 選考結果のご報告

2021 年度優秀学会発表賞選考委員長

橋本 剛（静岡大学）

2021 年 9 月 11 日～12 日に帝塚山大学主催でオンライン開催された日本グループ・ダイナミックス学会第 67 回大会において、「2021 年度優秀学会発表賞」の選考が行われました。

審査過程は、優秀学会発表賞選考規程に沿って、以下の手順で進められました。

はじめに、論文集原稿を対象とした事前審査として、部門ごとに理事全員による投票が行われ、各部門上位 3 位までが選出されました（ただしショート部門は同順位につき 4 発表を選出）。

その上で、当日の二次審査では、理事 3 名の審査者がそれぞれの発表を聴き、内容とプレゼンテーションを各 5 点で採点しました。

最終的に、一次審査の投票数（1 票を 1 点とカウント）と二次審査の採点を加算する方法で、各部門で総合得点が最も高い発表を受賞候補者として、その候補者案について選考委員の承認を得て、最終的に受賞者を決定いたしました。

その結果、今年度の同賞は、以下の発表における第一発表者の方々に授与されることとなりました（敬称略）。

<ロング・スピーチ部門>

■第一発表者：宮前 良平（大阪大学）

■発表題目：災害ボランティアを忌避しているのは誰か？

■共同発表者：渥美 公秀、稲場 圭信、山本 晃輔、大門 大朗

<ショート・スピーチ部門>

■第一発表者：清水 佑輔（東京大学）

■発表題目：若者アイデンティティと感染嫌悪が及ぼす高齢者偏見への影響

■共同発表者：橋本 剛明、唐沢 かおり

<English Session 部門>

■第一発表者：Yukari Jessica Tham (The University of Tokyo)

■発表題目：How much should and does the “strongest” member incur a cost for the group in an asymmetric volunteer’s dilemma?

■共同発表者：Takaaki Hashimoto, Kaori Karasawa

<ポスター発表部門>

■第一発表者：竹部 成崇（大妻女子大学）

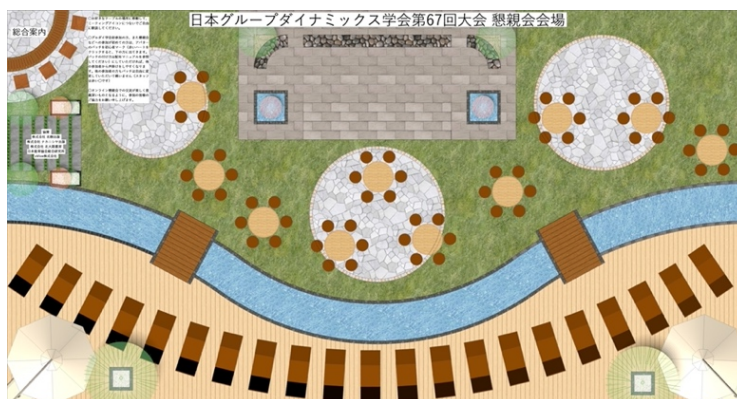
■発表題目：資源不足がゼロサム信念を介して内集団の範囲に及ぼす影響

—新入社員数を決めるという文脈を用いたシナリオ実験—

■共同発表者：中島 健一郎

受賞者の皆様、おめでとうございます。受賞者は、受賞した内容に関する論文を第一著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を有し、「特集論文」に準じて主査および副査1名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は受賞発表日（2021年9月17日）から1年間に限って有効です。

今年度は、オンライン開催という初めての試みで、本賞についても実施できるか、少なからず不安もありましたが、みなさまのご協力とご尽力のおかげで、無事に例年通りの形で実施することができました。本賞にエントリーして下さった発表者の皆様、審査にご協力下さった理事の皆様、そしてオンライン発表での実施を可能として下さった大会準備委員会の皆様に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



（大会で使った oVice の背景画像：上はポスター会場，下は懇親会会場）

宮前良平・渥美公秀・稲場圭信・山本晃輔・大門大朗

災害ボランティアを忌避しているのは誰か？

宮前良平（大阪大学）

長い歴史を持つ日本グループ・ダイナミックス学会の名誉ある賞をいただき大変光栄です。本学会は私の研究者のキャリアの一番初めに入った学会でして、多くの先生方から学術的刺激を受けている学会ですので、喜びもひとしおです。審査してくださった先生方、貴重なコメントをくださった先生方に心より感謝申し上げます。

本研究はコロナ禍でのボランティアイメージの変遷や構造を Twitter のつぶやきを対象にして分析してみようというのですが、実は、少し後ろ向きな理由から始まりました。私はこれまで被災地に実際に行って、ボランティア活動で汗を流しながら被災された方々やボランティアのみなさんの声を聞いていくというスタンスで研究をしてきました。しかし、コロナ禍はそれを許してはくれませんでした。昨年 2020 年の 7 月には球磨川流域で大きな水害が発生しましたが、私の住んでいる大阪では新型コロナウイルスの感染者が多く出ている頃で、自分がウイルスを持ち込んでしまうかもしれないという恐れもあり、ボランティアには行けませんでした。現地に行きたいのに行けないというモヤモヤは今でも覚えています。



そんな中で、Twitter などを用いて情報収集をしていると、ある人は「被災者のことを思えばボランティアは自粛すべき」とつぶやいていて、またある人は「被災者のことを思えばボランティアに行くべき」とつぶやいていました。どちらも「被災者のために」という点では共通しているのに、そこから導き出される結論が全く正反対になっているのです。これはどういうことなのだろうと疑問に思うと同時に、そういった「つぶやき」をしている人は、どうやら被災地の住民の方ではないようでした。となると途端にフィールドワーカーとしての興味が湧いてきて、実際に被災された方々は、県外からのボランティアにどういう印象を持っているのだろうかを聞いてみたいと思うようになりました。

本研究は、上で述べたことのうちの前半部分、つまり、コロナ禍での災害ボランティア（特に県外からのボランティア）の是非についての日本社会の空気を 70 万件以上のツイートから分析して可視化しようとする取り組みです。データとして示すことで、ボランティアという立場のあいまいさが少しは言語化できるようになったのではないかと思います。コロナ禍という特殊な時代だからこそ、普遍的な問題をよりビビッドに捉えられることができたのではないかと考えています。

この度の受賞を励みに、本研究を論文としてまとめ、実践へとつなげていければと思います。この度は誠にありがとうございました。

清水佑輔・橋本剛明・唐沢かおり

若者アイデンティティと感染嫌悪が及ぼす高齢者偏見への影響

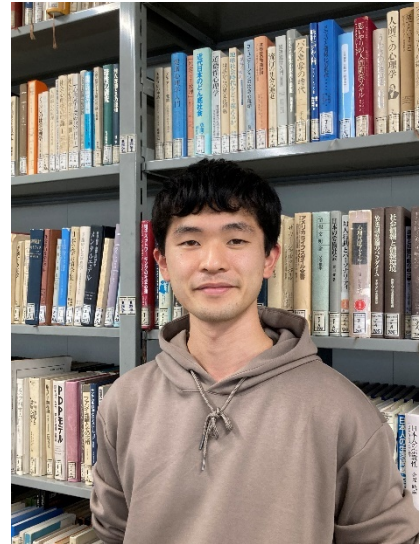
清水佑輔（東京大学）

この度は名誉ある賞に選出いただき、大変光栄に存じます。選考委員の先生方、並びに大会当日に貴重なコメントをくださった皆様に心から感謝申し上げます。

特定の社会集団に対する偏見は、グループ・ダイナミックス領域において古くから研究対象となってきました。また、SNS の普及や新型コロナウイルスの流行に伴い、高齢者に対する偏見は強化されつつあるように思います。Twitter では「金持ちの高齢者からもっと税金を取れ」「高齢者のためになぜ若者が自粛せねばならないのか」等の言説が散見されます。こういった態度は、高齢者と相対する「若者」への帰属意識（若者アイデンティティ）が強い人において、より顕著に見られるのではないのでしょうか。また高齢者は、他世代の人々から、過度に感染症・病気と結びつけて認知される傾向があります。すなわち、病的な対象に対する嫌悪感情（感染嫌悪）が強い人ほど、高齢者への態度が否定的でしょう。

以上のような仮説を検討したのが本研究です。本稿を読まれる先生方にとっては「何を当たり前のことを」と思われるかもしれません。実際、発表時に最も恐れていた批判は「何が新しいの？」というものでした。もちろん細かい点で新奇性はあるのですが（それが公開されるのは、いつか本研究が査読論文となる日を待つとして…焦）、ここでは本研究を踏まえた今後の方向性について触れようと思います。高齢者偏見を軽減するためには、他世代の人々に対して、(1) 高齢者と相対する社会集団への帰属意識を弱める、(2) 高齢者と感染症・病気の認知的連合を弱める、(3) 病的な対象に対する嫌悪感情を弱める、といった方略が考えられます。どれも今後の介入研究で着目すべき点であり、私にとって博士課程進学後の研究の方向性が整理できたことは大きな収穫です。

本研究の実施にあたって、唐沢かおり先生、橋本剛明先生には非常に多くのアドバイスを頂きました。社会心理学における伝統的な研究領域に足を踏み入れ、不勉強な点が目立つ私に日々厚い（アツい）ご指導を頂き、大変感謝申し上げます。また私事で恐縮ですが、現在祖母が高齢者施設にて闘病・リハビリ生活をしております。そこでは、職員の方々と高齢者、また、高齢者間の対人関係に関する心温まる話・興味深い話を頻繁に耳にします。高齢者偏見の研究に携わる者としては、「現場」の姿を組み込んだ実践的な研究に取り組みたいと思うのですが、未だ形になっておりません。私にその技量が身につくまで（そして孫として）、祖母には長生きして欲しいと切に願っております。本受賞を励みに今後も努力して参りますので、引き続きご指導を賜りますよう宜しくお願い致します。



Yukari Jessica Tham・Takaaki Hashimoto・Kaori Karasawa

How much should and does the “strongest” member incur a cost for the group in an asymmetric volunteer’s dilemma?

ターン 友加里 ジェシカ (東京大学)

私が日本グループ・ダイナミクス学会大会に参加するのは2回目、4年ぶりのことでした。初めて参加した大会は2017年に東京大学で行われたものです。当時一橋大学の学部4年生で大学院入試を控えていた私に、村田光二先生(現 成城大学教授)が大会の情報を教えてくださいました。学術大会とはどのようなものなのかまったく分からないまま、恐る恐る参加した記憶があります。これが記念すべき大会参加デビューとなりました。大会では面白いトピックを扱っている研究発表がたくさんあり、とても興奮したことを覚えています。

その後、無事に大学院に入学したは良いものの、修士課程1年目は参加申し込み期限に間に合わず、2年目は富山までの交通費を工面できず、博士後期課程1年目で参加しようと思ったらCOVID-19の影響で大会は中止になったため、参加は叶いませんでした。そして今年、ようやく2回目の参加を果たすことができました。オンライン開催の手筈を整えてくださった先生方には心から感謝しております。

私は今大会のEnglish Sessionで発表させていただきました。発表では、ボランティアのジレンマ状況——例えば、誰かがゴミ捨てをしないといけない状況や、誰かがハラスメントを止めないといけない状況など、集団のなかで誰か1人がコストを負担しなければいけない状況——で、①どのように仕事を分担するのが理想とされているのか、②実際に経済ゲームを行うと人々はどのように仕事を分担するのか、を検討した結果を報告しました。さらに、①理想と②現実の間に差が生じたことを受け、③なぜ理想と現実の間に差が生じたのか、を検討した結果も報告しました。③に関しては、様々な可能性のうち一部しかまだ検討できておらず、明確な答えが出ているわけではありませんでした。そのため、締まりのない発表になってしまったのではないかと心配しておりました。しかし、そんな締まりのない発表に貴重なコメントをくださった先生方(ひとりひとりのお顔を思い出しながらこの文章を書いています)がいらっしゃり、発表後は感謝の気持ちでいっぱいでした。

発表から一週間しないうちに、2021年度優秀学会発表賞をいただいたとの連絡を受けました。このような名誉ある賞をいただいたことに対して、素直に嬉しく、また、大変光栄に思う一方で、道半ばの研究の発表に対して賞をいただいたということもあり、今後もこの研究に真摯に取り組まねばという身の引き締まる思いにもなりました。最後になりましたが、大会運営にご尽力くださった先生方、優秀学会発表賞の選考委員の先生方、私の発表を聞きに来てくださった先生方、発表に対してコメントをくださった先生方、また、日ごろより私の研究にアドバイスをくださっている先生方、本当にありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



竹部成崇・中島健一郎

資源不足がゼロサム信念を介して内集団の範囲に及ぼす影響
—新入社員数を決めるという文脈を用いたシナリオ実験—

竹部成崇（大妻女子大学）

この度は名誉ある賞を頂き、誠に光栄に存じます。選考委員の先生方、並びに発表の場にて貴重なコメントを下された皆様に、心よりお礼申し上げます。

本研究は、資源不足時に人が内集団の範囲を狭めるプロセスについて検討したものです。社会科学の様々な領域の研究が、資源不足時には人は内集団の範囲を狭めようとすることを示していますが、その心理プロセスは十分に明らかにされていませんでした。本研究では「誰かが手に入れると誰かが失う」「全体のパイは決まっている」と考える程度である「ゼロサム信念」に着目し、これが資源不足時に内集団の狭隘化が進む原因であるかどうかを、シナリオ実験を用いて検証しました。その結果、予測通り、資源不足はゼロサム信念を介して内集団の範囲を狭めていました。

反移民を掲げるトランプ氏が米大統領選で勝利するなど、社会ではしばしば内集団の狭隘化と思われる現象が生じますが、こうした風潮は様々な摩擦を引き起こす可能性があります。資源不足が内集団の狭隘化を導くプロセスを検討した本研究は、そうした摩擦の回避のための示唆を得ることに繋がるのではないかと考えています。また、ゼロサム信念は内集団の狭隘化以外にも様々な認知や行動と関連することが示されているため、本研究の知見と考え合わせることで、まだ実証されていない資源不足の影響を解明していくことができるのではないかと考えています。とはいえ、本研究には多くの限界点が残されているため、今後はまずそれらの限界点を補う研究を進めていきたいと思っています。

なお、本研究は、予備実験に基づいた例数設計を行い、OSFにて事前登録を行ってから実施しました。限界点が多くある研究にもかかわらず本賞を頂くことができたのは、こうした手続きをきちんと踏んでいたことも一因ではないかと推察しております。例数設計や事前登録は初めての経験で戸惑うこともありましたが、もしこうした点も評価して頂けていたようでしたら、うれしく思います。

最後になりますが、本研究は多くの方々の協力なしには実施できませんでした。実験に参加してくださった方々、様々なコメントを下された先輩や後輩の皆様、そして共同研究者である中島健一郎先生に、改めて感謝を申し上げたいと思います。時間という資源の不足に直面し、ゼロサムの考え、何かを諦めそうになってしまうこともありますが、本章を励みに、今後もしできる限り研究に勤しみたいと思います。この度は誠にありがとうございました。



国際化支援

国際学会発表支援制度・参加費支援制度について

常任理事（渉外担当） 五十嵐 祐(名古屋大学)

2021年度は、コロナ禍による海外渡航の制限を受け、旅費のみが支援の対象となる通常の国際学会発表支援制度とは別に、参加費のみを支援の対象とする国際学会発表参加費支援制度を臨時に設け、募集を行いました。選考委員会による審査の結果、3名の会員に対してオンライン学会の参加費の支援を行いました。制度の決定から周知、締め切りまであまり時間がなく、応募者の皆様にはご迷惑をおかけしました。

新型コロナウイルスワクチンの接種が世界的に進んでおり、いくつかの国際学会では、対面での開催や、対面＋オンラインのハイブリッド形式での開催が模索されています。2022年度の支援制度の形式についてはまだ確定していませんが、今年度同様、状況に応じて柔軟に対応していく予定です。

来年度の応募締め切りは、7月31日(日)を予定しています。本制度では、締め切りの時点で発表予定の研究だけではなく、すでに当該年度に学会発表を行った研究についても支援対象となります。また、他学会の支援制度との重複受給も可能です。詳細は以下のページをご参照ください。ぜひ皆様からのご応募をお待ちしています。

関連ページ：<http://www.groupdynamics.gr.jp/support.html>

研究の国際化支援制度(英文校閲補助)について

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際の英文校閲代金の一部を補助するものです。昨年度は3名の会員に補助を行いました。今年度も3月末まで引き続き募集を行っています。応募者の年齢制限はなく、複数論文の校閲費を合算して申請できます。また、過去に補助を受けた会員の方々も、当該年度以降に改めて申請することが可能です。詳細は以下のページをご参照ください。ぜひ皆様からのご応募をお待ちしています。

関連ページ：http://www.groupdynamics.gr.jp/support_international.html

国際学会発表参加費支援制度 採択者の声

清水 佑輔（東京大学）

この度は、国際学会発表参加費支援制度によりご支援を頂き、誠にありがとうございます。2021年9月23日から24日にオンラインで開催された Aging and Social Change: 11th Interdisciplinary Conference に参加致しました（発表題目：What Makes Elderly People View Themselves Negatively?）。本研究では、どのような個人差要因を持った高齢者が、高齢者という社会集団を否定的に捉えるのかについて調査しました。その結果、感染症や病気に対する嫌悪感情（感染嫌悪）が強い高齢者ほど、高齢者という社会集団を否定的に捉えていることが示されました。一般に高齢者は、他世代の人々によって、感染症や病気と過度に強く結びつけて認知されやすく、忌避される傾向があります（病気回避メカニズムの活性化）。これが高齢の参加者においても見られた点が、本研究の成果だと考えております。

本国際学会大会は、タイトルの通り「高齢化と、それに関連する社会の変化」という、やや狭いテーマを扱っています。実際に他の研究者の発表を見ると、研究テーマが自分と非常に近いものが多く含まれておりました。日本グループ・ダイナミックス学会も含め、一般的な心理学系の学会大会の場合、自分の研究テーマとは異なるものや、少し毛色の違う研究から刺激を得られるメリットがあると思います。一方で、本国際学会大会のようなテーマ特定型の大会では、興味・関心が非常に近い研究（者）と出会える確率が高いというメリットがあるのではないのでしょうか。双方の利点を生かしながら、今後も多くの学会大会で研鑽を積んで参りたいと考えております。

さて、本学会大会はオンラインでの開催でした。私は現在修士課程2年ですが、これまで発表した国内・国際学会は、全てオンライン開催です。大判ポスターを丸めて入れるための黒い筒が、部屋の片隅で埃を被っております。ただ、このような状況だからこそ、例年よりも多くの学会に参加し、多くの研究発表に触れることができているとも言えます。他の国際学会大会ですが、深夜25時と明朝4時のオンライン発表を聞くために徹夜した思い出が懐かしいです。来年度以降、どのような形式の学会大会が主流となるのか分かりませんが、積極的に参加・発表を重ねたいと思います。

最後になりましたが、大会参加にあたってご支援を賜りました日本グループ・ダイナミックス学会、審査頂いた先生方など、関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。また、本研究の実施にあたって多くの助言を頂いた唐沢かおり先生（東京大学）、橋本剛明先生（東洋大学）に、この場を借りて感謝申し上げます。「もうそろそろコロナ終息だろう!」と意気揚々、パスポートを作成しておよそ1年が経過します。これが日の目を見る機会を心から願いつつ、今後も研究活動に精進して参ります。

国際学会発表参加費支援制度 採択者の声

笠原 伊織（名古屋大学）

この度は、国際学会発表参加費支援制度によるご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。新型コロナウイルス感染症の影響が続き、多くの学会がバーチャルでの開催となる中、今年度はオンライン学会での発表を対象とした「国際学会発表参加費支援制度」が設けられ、その支援をもとに、私は The 14th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology (AASP 2021, 7/29-31) に参加し、口頭発表を行いました。AASP はアジア・太平洋地域の研究者を中心とした社会心理学の国際学会であり、隔年で大会が開催されています。今回の大会で設定されたテーマは "Social Psychology of Intergroup Conflict: Towards Peace and Reconciliation in Asia" というもので、自身のテーマである「社会的分断」とも密接に関わるものでした。以下では、発表者として、そして参加者として、学会に参加しての感想を述べていきたいと思います。

まず、発表者としては、英語での口頭発表経験がほぼ無く、大変緊張したことを覚えています。しかし、私の発表を初めて聞く、異なる文化的背景を持つ人々に向けて、分かりやすく、必要な情報を時間内に伝えるにはどうしたら良いかを考え、発表を設計していく作業は、自身の研究について振り返る良い機会になりました。また、ゼミのメンバー同士で集まって発表練習を行い、フィードバックをもらったことが、大きな助けになったと思います。準備の甲斐あって、当日は既定の時間内に発表を終え、セッション終了後には参加者の方から質問をいただき、それに回答する中で自身の研究について再考することができました。当日は、突如発表順序が入れ替わって1番目に発表することになったり、セッションの時間が長引き質疑応答が個別のチャット形式になったりと、慣れないオンライン学会で予定外のことも多かったのですが、それも含めて自身にとって貴重な経験になったと感じています。

ひとりの参加者としては、これまでいくつかの国際学会にオンライン形式で参加しましたが、AASP はアジア圏の研究者が中心ということもあり、欧米の学会と比べて時差を気にせずに参加できるという点が非常に魅力的でした（今回の場合、韓国標準時を基準にプログラムが組まれていたため、日本とは時差がありませんでした）。また、今回の学会テーマを反映して、全体的に「社会的分断」や「集団間対立」などに関わる研究発表が多く見られたように感じます。自身がまさに社会的分断をテーマに研究を進めているため、参考になる研究発表が数多くあり、今後の研究へ向けて良い刺激を得ることができました。

今回、AASP 2021 への参加を通じて自身の研究テーマとも関連した多くの研究に触れる中で、自身の研究の意義や面白さを再認識することができました。今回の経験を励みに、今後も研究を続けていきたいと思います。最後になりますが、改めて、この度は貴重な経験につながるご支援を頂きましたこと、厚く御礼申し上げます。

編集委員長 坂田桐子（広島大学）

副編集委員長 中島健一郎（広島大学）

コロナ禍でまだまだ不透明な部分がある中で、実験社会心理学研究への投稿ならびに論文の査読にご協力いただき、本当にありがとうございます。夏のぐるだいニュースの中で「楽しみは先にとっておくの心もちで…」とお伝えしましたが、61巻1号の内容はいかがでしたでしょうか。

現在、編集委員会では「論文を評価するのは読者」という精神のもと、できるだけ多くの論文を発表できるようサポートすることを大事にしております。これが可能なのは、ひとえに論文を投稿してくださっている会員のみなさまと、審査に協力してくださっている査読者のみなさまのおかげです。心よりお礼申し上げます。

今後も読者のみなさまの幅広いニーズに応えることを目指し、多くの論文をお届けできるよう努めたいと思います。引き続き、実験社会心理学研究をよろしくお願いいたします。

実験社会心理学研究 2021 年度 61 巻 2 号 — 掲載予定論文

(2022 年 3 月発行予定／早期公開済み)

原著論文（11/22 早期公開済）

■ 野波 寛・坂本 剛・大友 章司・田代 豊・青木 俊明

NIMBY 問題における当事者はなぜ優位的に正当化されるのか？

：地層処分場の決定権をめぐるマキシミン原理と道徳基盤の影響

展望論文（11/26 早期公開済）

■ 頼政良太・宮本匠

日本における災害ボランティアセンターのこれまでとこれから

：「公」と「民」の対立を乗り越えた先に

会費改定についてのお知らせ

会長
北村英哉(東洋大学)

今回の改定の趣旨

常任理事会で、現在の学会が抱える問題を検討し、監事の先生からもご意見をいただいた結果、会員の年齢構成がやや高齢化し、大学院生の会員がきわめて少なくなっていることが学会の将来にとって問題であることが認識されました。同時にネットの活用、ペーパーレスなどの問題と合わせると、これらの解決方法として、機関誌のペーパーレスによる財源によって大学院生会員の会費のインパクトある大幅値下げ（5000 円→2000 円）を実行するという案が得られ、これに基づき理事会、総会で検討し、ご理解をいただきました。

完全ペーパーレスでは、機関購入分を失うことから、財源に好ましい効果が得られるレベルで、印刷された機関誌の維持を図るため、収支バランスを検討し、希望される会員は印刷物での送付も可能と判断しました。ただし、これを健全な会計として行うためには、印刷物送付となる方へ 1000 円の負担をお願いすることでバランスが得られるとの判断です。

さらに経費について努力し、近い将来において、一般の正会員の年会費を 1000 円程度さげ、機関誌送付があった場合も従来額、そうでない場合は会費の値下げにつながるように検討していく予定です。新型コロナウイルス感染症蔓延に襲われたおよそ 2 年の間、逆境下で見出された光明は新たな働き方やコミュニケーションでした。常任理事会も遠隔会議ツールを用いて非対面で行い、ある程度それを続けることで（年に 2 回くらい対面など）、交通費なども削減できることがわかりました。引き続き会員にメリットが見られるような本来の研究活動が活発になるような支援業務を本務として、機関誌特集企画や研究支援企画なども実施しております。さらに今回ご評価いただいたような大会運営を開催校と共に努めて参るつもりです。

以上の総合的な施策の一環としてのペーパーレス化と会費改定についてご理解いただけたらと考えております。学会活動へのご支援のほど、お願い申し上げます。

(以下、関連する「事務局からのお知らせ」が続きます。)

事務局からのお知らせ

常任理事（学会事務局長）

尾崎由佳(東洋大学)

2022 年度以降の年会費等および機関誌送付について

（下記は、11 月 16 日付のメールマガジン(JGDA_Flash)にてお知らせした内容と同じです。）

日頃より当学会の活動にご理解とご助力を賜りまして、誠にありがとうございます。

会員のみなさまへ、お知らせが 2 点ございます。

1. 当学会では、会員のうち若い世代の活躍をサポートするべく、正会員（学生）の年会費の値下げを行います。これまで正会員（学生）：5,000 円であった年会費が、2,000 円と大幅な負担軽減となります。また、入会金を廃止いたします。
2. 時代の要請であるペーパーレス化を推進するため、また印刷費の軽減のために、機関誌「実験社会心理学研究」の冊子送付について基本的に停止とします。つまり、これまで会費納入者全員を対象に送付していたところを、2022 年度以降は「希望者のみ」を対象にすることにいたしました。ただし、冊子送付を希望される方には印刷・郵送費等の一部をご負担いただくことになり、年会費にプラスして 1,000 円のご請求が発生します。なお、「実験社会心理学研究」は J-Stage において電子ジャーナルとしての公開を継続いたしますので、バックナンバーを含めてアクセス可能です。

上記 1. 2. の改定については理事会の承認を得た上で総会にて報告されました（2021 年 9 月）。

このときの理事会・総会資料については、以下リンク先のお知らせをご覧ください。

http://www.groupdynamics.gr.jp/pdf/meeting67th_2021_modification.pdf

なお、この改定は 2022 年度（2022 年 4 月 1 日～）からの適用となります。

したがって、2022 年度より、正会員については冊子送付のあり／なしに応じた以下 A～D の 4 種類の会員種別となります。（正会員以外の会員種別については、従来通りの扱いとなります。）

- | | |
|------------------|----------|
| A 正会員（一般）：冊子郵送なし | 10,000 円 |
| B 正会員（一般）：冊子郵送あり | 11,000 円 |
| C 正会員（学生）：冊子郵送なし | 2,000 円 |
| D 正会員（学生）：冊子郵送あり | 3,000 円 |

機関誌の冊子送付希望調査

上記に伴い、次年度の年会費等請求（2022 年 3 月予定）の前に、正会員のみなさまから会員種別の変更希望を承ります。

機関誌の冊子送付を希望されない方（J-Stage 参照のみ）は、ご回答不要です。回答されなかった方についてはデフォルトで、正会員（一般）の場合は 10,000 円（上記の A）、正会員（学生）の場合は 2,000 円（上記の C）のご請求となります。

機関誌の冊子送付（任意オプション：+1,000 円負担）を希望する方のみ、以下リンク先の Google フォームからご回答および送信をお願い致します。正会員（一般）の場合は 11,000 円（上記の B）、正会員（学生）の場合は 3,000 円（上記の D）のご請求となります。

機関誌「実験社会心理学研究」の冊子送付希望調査

【回答締切：2022 年 1 月 22 日】

<https://forms.gle/8oqy1TANpzZQthc8A>

（上記のリンクをクリック、もしくは右の QR コードを読み込むことで回答フォームが開きます。）



注： 正会員のうち冊子送付を希望する方のみ、このフォームからご回答ください。
送付を希望されない方および正会員以外の方（名誉会員など）は、ご回答不要です。

宜しくお願い申し上げます。

グルダイ学会関係連絡先

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等の変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどの配信先の登録・変更・停止等の連絡先として、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会 事務支局

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る

中西印刷 (株) 学会フォーラム内

TEL : 075-415-3661

FAX : 075-415-3662

E-mail : jgda@nacos.com

学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学社会学部 尾崎由佳 研究室

TEL : 03-3945-4479

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

投稿論文・学会誌編集関連【論文投稿先・審査書類送付先】

日本グループ・ダイナミックス学会 編集事務局

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る

中西印刷 (株) 営業部編集校正課内

TEL : 075-441-3155

FAX : 075-417-2050

E-mail : jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

広報関連【ぐるだいのニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、書評、公募情報など】

〒811-1313 福岡市南区日佐 3-42-1

福岡女学院大学 藤村まこと 研究室 (広報担当 常任理事)

E-mail : office@groupdynamics.gr.jp